

飛騨高山「飛騨民俗村 飛騨の里」と白川郷御母衣「遠山家」。

二〇一四年九月九日（飛騨の里）、九月十一日（遠山家）。

岡 哲文

飛騨高山駅から定期循環バスに乗って約一〇分の所に、「飛騨の里」という施設がある。管理事務所の「旧日下部家」と「旧西岡家」、「旧若山家」といった白川郷の合掌造り民家以外に、荘川から移築した建物が四棟ある。

〇五年、五箇山でのこきりこ祭りに行く途上、飛騨高山のこの施設に白川郷の移築された合掌造りがあることを知り、「若山家」だけを取材したことがあった。（この時、旧西岡家は修復途中で内部を見ることが出来なかった。）十三年に荘川の里で荘川流合掌造りの建物を見て以来、荘川流の民家の取材も受けたいと思い、取材することを決意した。

飛騨高山は伝統的建造物群保存地区の古い町並みを始め、旧陣屋跡など観光地としても有名で、平日にもかかわらず多数の観光客が、特に外国人が多くて、飛騨の里でも欧米系の観光客が来ているのを見た。三町や下二之町大新町の古い町並みには、多数の店舗が軒を連ねて気軽に入ることも可能である。スイーツや飛騨牛などを食べられる店もあり、特に一番の人気は飛騨牛の握りずしである。長蛇の列ができており、少し驚いてしまった。余り列の長くなっていない時を見計らって飛騨牛の握りずしを食した。

「飛騨の里」のバス停で下車し、広い駐車場を右手に階段を登った所に苔むした合掌造りの家屋が目に入る。管理事務所「旧日下部家」である。事前に申し込みれば、ガイドによる説明が受けられるので、事前申し込みをしておいた。



管理事務所の旧日下部家。飛騨高山の古い町並みと飛騨牛の握りずし。

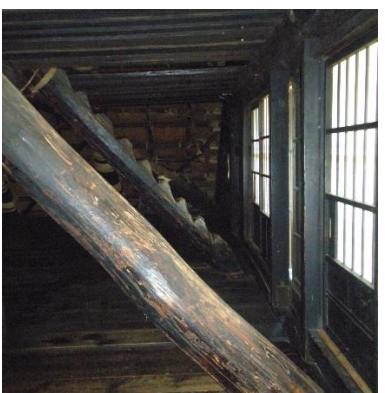
ガイドの方から説明を受ける。まずは飛騨の里の案内から始まる。飛騨の里は建物の博物館であり、この建物は、元々あったものではなく、飛騨一円から立ち退きを迫られた重要なものを移築して保存したという施設である。

最初に「旧若山家」から取材した。この合掌造りの建物は元々岐阜県大野郡白川村下滝村（荘川村）にあったもので、飛騨の里への移築の際の建築部材の墨書きされた年代から推測されるのは寛政九年（一七九七）だが、以前は家伝により宝暦初年（一七五一）に建造されたといわれる。この家の最大の特徴は「せがい造り」（側柱上部から腕木を突出させて小板を張った棚を持つ造り）で、組頭、名主以上にしか認められないものだった。

この合掌造りの民家も、昨年夏に訪問した名古屋の東山植物園内に移築された「旧太田家」同様に御母衣（みほろ）ダム建設によって昭和三四年（一九五四）に高山市に移築され、「飛騨民俗館」として一般に公開されるようになった。

この家の特徴は先ず、玄関にトイレがあることである。これは合掌造りの家、五箇山でもそうだが、煙硝作りと関係がある。煙硝作りに人尿が不可欠であったからだ。またこの家は荘川にあった、元は荘川造りで寄棟であったが、途中から合掌造りに直した、その痕跡を残して、合掌造りの発生が分かる大変貴重なものである。

昭和五二年（一九七七）六月二十七日に国指定重要有形文化財に指定された。その最大の理由は二階にある。屋根裏に二本の柱がある。今は用をなしていないが、荘川系の寄棟造りでは窓が出来ず、風通しも悪いためにこの柱ののっていた屋根に更に柱と窓をに増築した。増築によって二階だけでなく三、四階の面積も増え、養蚕のスペースも更に増える。その利点があつて、蚕を飼うために広い所と風通しを良くするために合掌造りにした。



若山家外観、屋根が苔むしている。玄関にある煙硝作りのためのトイレと、二階屋根裏にある、荘川造りから合掌造りに直した時の柱。

ガイドの方と歩きながら、次の「旧八月一日家（ほづみけ）」へ向かう。この家は荘川流入母屋造りである。この家の苗字、八月一日と書いて「ほづみ」と読むのは、旧暦の八月一日、新暦だと九月一〇日ごろに粟や稗などの穂が実り、それを収穫したことからの珍しい苗字になった。白川村三屋河（現・高山市荘川町三屋河）の西願寺の庫裡として江戸時代末期に建てられた。屋根が苔むしているのが分かる。ここでは現在室内にて、飛騨地方でもち

いられたソリの展示が行われており、内部に上がって見学することはできない。飛騨地方において、積雪が多い冬の期間、ソリが最も重要な運搬手段で、運ぶ対象や用途に応じて様々なソリが用いられた。また、元庄屋で、囲炉裏が三つあるのが特徴である。

この家は前述したとおり、寺の庫裡だったため、家の横に鐘堂があつて、自由に鳴らすことができない。試しに鳴らしてみたが、結構コツが必要で素人には上手く鳴らせない。外国人観光客が珍しそうに鳴らすのを体験していた。大正六年建築で、揣摩寺（臨濟宗妙心寺派）の住職より寄贈された。毎年除夜の鐘つきが行われ、観光客は勿論地元の人たちにも開放している。



莊川流の旧八月一日家の外観。内部に展示されているソリの一つ。鳴らすことを体験できる梵鐘。

旧吉真家（よしざねけ）も入母屋造りで、吉城郡小鷹狩郷角川村（現・飛騨市河合町角川）から江戸中期の安政五年（一八五八）に建てられた国の重要文化財である。屋根が葺き替えただばかりで綺麗で、内部にある生活民具は、この家のもではないが、往時の生活の一端を伺える。

国の重要文化財である理由はこの家の免震構造にある。安政五年の角川地震（飛越地震）が発生し、マグニチュード七を超え、全壊家屋三七八軒、半壊四九七軒、死者二〇七名に及び、全滅した集落もあった中で、この家は持ちこたえた。そのため、平成七年（一九九五）の阪神淡路大震災の後、建築学者が多く見学に来た。六本の柱で正方形型にして、更に太い梁で四方を囲んだ。ちょうど正方形の箱を真ん中に置き、後から寄棟にした。建築学的にも非常に優れた構造である。二つ目はほぞ形式といって、柱に穴をあけて通し楔でとめてある。地震で揺れて楔が折れると、揺れを吸収してこの家は地震の倒壊を免れたのではないかといわれている。



吉真家の外観と内部の展示品、囲炉裏。

(内部に沢山民具が展示してありますが、それらはこの家の物ではありません。)

次は「兜造り」が特徴の「旧道上家」である。この家は県北部、越中(富山県)との国境にあった吉城郡小嶋郷加賀沢(かがそ)にあり、江戸時代末期に建てられた県指定重要文化財である。妻側のかやぶき屋根の下部が大きく切り取られ、ここに障子窓を設けて中二階を形成している。このように中二階や二階を広く取って養蚕を営めるスペースを設けた建物を「兜造り」といい、山梨県や関東等で見られる形式である。中二階と二階は養蚕だけのスペースであって、住居スペースではない。東京の檜原村数馬にこのような古民家が数件あり、内部公開をしている。また富士五湖の近くに「西湖癒しの里根場」という兜造り民家を移築復元した施設がある。

更にこの家にはケヤキが使われている。江戸時代にケヤキは「御禁木」、或いは「御止木」と呼ばれ、民家に使用することを幕府から禁じられていたが、当地域にケヤキが沢山あったことを物語っている。

屋根は苔むしていないが、外観の柱や木材は結構年月が経っているように見えた。



「兜造り」の道上家外観。屋根裏の養蚕スペースの展示品の数々。

この旧道上家の隣に先ほどの旧吉真家があり、その隣が旧富田家である。屋根は苔むしており、暫く葺きかえていないのが分かる。入口の近くに大八車の車輪が多数、そして本物の大八車も飾ってある。岐阜県吉城郡下高原郷杉山村(現・飛騨市神岡町杉山)に建てられた、これも県指定の重要文化財である。この家は神岡鉦山に近く、飛騨と越中を結ぶ越中東街道沿いにあり、神岡鉦山より北の茂住(もずみ)鉦山に送る荷物や牛馬の中継を営んでいた。戸口の横には馬をつないで水を飲ませる木製の長い貯水槽みたいなのが置いてある。

内部には囲炉裏や民具が展示してあるほか、冬場を除きボランティアの方が地元の「飛騨さしこ」の実演も行っている。また更にガラスケース内にはあるが、郷土玩具の展示も行っている。



苔むした屋根と大八車の車輪が特徴の旧富田家外観。ボランティアによる実演と郷土玩具の展示。

最後に見るのは合掌造りの「旧西岡家」である。この家は蓮受寺の庫裡であり、白川郷加須良(かずら)から移築された県の重要文化財、江戸時代後期の築である。白川郷の加須良は白川村の最も北端の集落で、峠ひとつ越えたと富山県五箇山の桂(かつら)集落になる。両村は結びつきが強く、生活面では共同体であったが、過疎化と豪雪のために加須良集落が昭和四二年(一九六七)に、続けて三年後には五箇山の桂集落が四十五年(一九七〇)に集団離村し、五箇山の桂集落は現代、ダムの底に沈んでいる。

以前紹介した白川郷荻町集落の反対側、白川郷高速バスターミナルにある「総合案内所であいの館」を背に車道を横断した所に、県の重要文化財九棟を移築した「野外博物館 合掌造り民家園」があり、この園内に五棟の加須良から移築した古民家がある。外国人を含めた観光客であふれかえっている荻町集落とは対照的で、私が訪問した限りではこの合掌造り民家園には沢山の訪問客はいないから、一軒一軒ゆっくり内部まで見学できる。在りし日の加須良の白黒映像も見られる。五箇山の桂集落から移築した民家に関しては、神奈川県川崎市「日本民家園」内に一軒、県の重要文化財「山田家住宅」がある。詳しくは日本民家園にお問い合わせを。

ここの旧西岡家を見てから白川郷の合掌造り民家園を見学し、さらに川崎市の日本民家

園を訪問して、桂・加須良両方の移築古民家を見て回ってはいかがだろうか。



「旧西岡家」外観と、「まや」に置いてある木製の牛、養蚕の道具等。

白川郷 「旧遠山家民俗館」。

一昨年(二〇一三年)一〇月、荘川から名古屋発の高速バスで白川郷へ向かう途上、御母衣ダムや荘川桜も過ぎてしばらくすると、合掌造りの大きな家が目に入った。木製の板で「遠山家住宅」と書かれていたが、当然バスは停車せずにそのまま白川郷に行ってしまった。だから今回は是非見学しようと、白川郷滞在を一日伸ばした。

免許を持っていない私は、いつでも公共交通機関に頼らざるを得ないが、白川郷のバスターミナルから遠山家近くの牧のバス停までは一日五本の便しかなくて、濃飛バス「金沢・白川郷線」のバスで一番早くて午後一二時五二分発しかなくて、帰りは牧発が一五時四五分である。遠山家だけの見学だから、それ程時間はかからないだろうと思いい、この便に乗ることにした。「旧遠山家」は、バス停から少し離れた所にあるが、苔むした茅葺き屋根と木目に趣が感じられる合掌造りであり、建築は文政一〇年(一八二七)であり、大家族制をしのびせる壮大な規模と峡谷の緑深い環境に調和する風格と美しさを語る。一九七一年(昭和四六)に国の重要文化財に指定された。この遠山家は「近隣の家から灰汁煮硝(粗製の硝石)を集めて精製してできた上硝硝を村外に販売していただけでなく、床下で硝硝土を調整し、灰汁煮硝も生産していた」民家である。

尚、周囲には雑貨屋と旅館がある以外何も無く、遠山家の敷地内にトイレが併設されているが、今ではもう殆どお目にかかれぬ汲み取り式なので、汲み取り式トイレが苦手な方は、旅館等でトイレを借りることをお勧めします。

遠山家にはガイドによる説明等は無く、また場所柄、平日だったこともあって、訪問者は私と車で来た方が一人と現在の住人だけだった。

この遠山家は昭和の初めにナチスの台頭を嫌って日本に亡命した建築家、ブルーノ・タウト(一八八〇〜一九三八)が昭和一〇年(一九三五)五月一七〜一八日に滞在し、「日本美の再発見」の中で「構造が実に論理的、合理的」と絶賛している。

私は白川郷に興味を持って以来、パンフレット等でタウトの白川郷訪問のことを知った。タウトが訪問したものは荻町だと思いついていたが、訪問したのはこの遠山家のことだったのである。

また白川郷の合掌造り民家イコール大家族といわれるのもこの遠山家のことらしく、これは荻町や五箇山でも同じことであるが、山間の里で耕地に適さず、養蚕や煙硝作りが主な産業だったために分家ができず、相続者である者のみが婚姻をなし、他の兄弟姉妹は生家に留まり通い婚であり、生まれた子供の大部分は母方の生家で育てられた。近世後期以降明治に入ってから顕著になり、昭和三〇年に一番家族が多くて四五人ほどいた。内部に当時の家族を写した大きな写真とタウト訪問時のことが書かれた写真とボードで説明がある。

尚、これは東京に帰宅後、今年（二〇一五年）に入ってから偶々仕事のなりゆきで知ったことだが、タウト訪問よりも四年前の一九二九年（昭和四）に小説家で俳人の瀧井孝作（一八九四 明治二七〜一九八四 昭和五九）も訪問し遠山家を見学して、「多人数が蚕飼をしてゐた。」のを見て、「実に頭デッカチだ。けれど堂々として美しい家だ。」と評している。他の合掌造りと同じく、囲炉裏、絢爛豪華な仏壇、それから書院造の「おくのどい」などがある。勿論屋根裏へ上がって養蚕やかつての生活民具などを見ることも出来る。私が一番目にしてびっくりしたのが、家紋入りの銅製の茶器である。これは他では見たことが無いものである。白川郷滞在を一日伸ばして、バスの便に多少不便を感じても見る価値はある。



旧遠山家外観。合掌造りはここしかないからすぐわかる。銅製の茶器、養蚕道具の展示品。ガラスケースに入っており、説明書きがなされている。

基本データ。

「飛騨民俗村 飛騨の里」

〒五〇六・〇〇五五 岐阜県高山市上岡本町一・五九〇

電話番号 〇五七七・三四・四七一一

FAX 〇五七七・三三・四七二四

開館時間 午前八時三〇分〜午後五時（年中無休）。ライトアップは午後九時まで。

（ボランティアの説明は事前予約が必要です。）

URL <http://www.hida.jp/hidanosato/>

入館料 大人・高校生七〇〇円 小中学生二〇〇円。大人団体二〇名以上六〇〇円 二〇〇名以上五〇〇円 高校生団体二〇名以上三〇〇円 二〇〇名以上二五〇円 小中学生団体二〇名以上一五〇円 二〇〇名以上一〇〇円。

交通 JR飛騨高山駅から定期循環バスで一〇分。「飛騨の里」バス停車。
中部縦貫自動車道高山西インターチェンジから約二〇分。

「旧遠山家民俗館」

（文化財修復のため、平成二六年十一月から平成二八年三月まで休館。）

〒五〇一・五五〇六 岐阜県大野郡白川村御母衣一二五

電話（FAX兼用） 〇五七六九・五・二〇六二

休館日 毎週水曜日。（水曜日が祝日の場合は、その前日）年末年始。

入館料 一般三〇〇円 小中学生一五〇円

一般団体二五名以上二四〇円 小中学生団体二二〇円

営業時間 午前一〇時〜午後四時。

交通 飛騨高山バスセンターから白川郷経由牧まで。濃飛バス「金沢白川郷線」牧バス停車すぐ。

濃飛バス「白川郷線」。濃飛バスHP <http://www.nouhibus.co.jp/> ↓乗り合いバス ↓「白川郷線」。

参考資料。

ブルーノ・タウト著 篠田英雄訳『日本美の再発見 増補改訂版。』岩波新書 一九七二年
三一刷。（入手不可。Amazonにて購入。）

ブルーノ・タウト 『日本美を再発見した建築家』中公新書 二〇一二年六月発行。
ブルーノ・タウト著 篠田英雄訳編 『忘れられた日本』中公新書 二〇〇七年六月初版。

瀧井孝作 『瀧井孝作全集 第六巻』中央公論社 昭和五四年二月発行。（昭和五年 一九三〇年一月六日。『週刊朝日』第一八巻第二二号。『現代日本紀行文学全集』ぼるぶ出版から。）

馬路泰藏編著 『知られざる白川郷 床下の焔硝が村を作った』風媒社 二〇〇九年一月第一刷。（以上四冊は図書館及び書店にて入手可です。）